

「あなたのとなりを歩きたい。」

山形県中山町立中山中学校

三年 五十嵐 菜 緒

「私にはなにができるだろう。」

そう考えたのが私が手話を勉強し始めた理由です。

夏休みに入っすぐ、私は友達と一緒に高校の学校説明会に参加しました。資料をもらうために列に並ぶと、混んでいたために周囲の人に押され、前にいた人につかっしまいました。私はあわてて謝ろうとその子の顔を見ました。すると、その子の耳に補聴器がついているのに気づきました。よく見るとその子と同じ制服を着た他の二人も同じように補聴器をつけていました。そして、三人は手話で会話をしています。私は何も言えずにうつむいてしまいました。

学校説明会は予定よりも早く終わり、各自解散となりました。私の住む山形県では、一時間に一本ほどしか電車がありませんから乗り遅れることはできません。しかし、私は電車の時刻表を忘れてしまいました。次の電車がいつ来るのか全くわからなくなっていました。高校内のホールに座り、これからどうするかを友達と話し合っていると、隣の席に座っている子の手元に目が留まりました。その手には時刻表が握りしめられています。貸してもらるように頼もうと

その子の顔を見た瞬間、はっとしました。「今朝のあの子だ……」私は悩みました。声をかけようか、でも、どうすれば相手にわかってもらえるのだろうか。耳の聞こえない子に私の思いを知ってもらうのはやはり不可能なのではないか、と何度も思いました。しかし、自分の中から「それでいいの？ あきらめないで。」という声が聞こえてくるような気がしました。私はカバンの中に小さなノートが入っていることを思い出し、それを取り出すと鉛筆で一字一文字に思いをこめて丁寧に書きました。「時刻表を見せてもらえませんか。」と。そのノートを握りしめ、その子の元へ歩きました。たった数歩の道のりがとても長く感じられます。引き返そうかと何度も思いました。しかし、もう一人の自分が「あきらめてはいけない。」と叫びます。私はもう迷いませんでした。その子の前に立つと、目の前にノートを静かに置きました。その子ははじめ、すごく驚いた顔をしていましたが、ノートを読み終えるとニコリと笑い、時刻表を見せてくれました。それまでよほど不安だったのでしょうか、伝わったことがただ嬉しくて思わず涙がこぼれそうになりました。時刻表を返す時、私は唯一知っていた「ありがとう。」の手話を慣れない手つきでして見せました。するとその子は笑顔で首を振りながら「いいえ。」と言いました。すごくすごく小さな声でした。しかし、まるで私の心に直接入ってきたかのようにじんわりとしみる声でした。耳も聞こえて声も出せる私が手話を使い、耳が聞こえず、うまく話せないその子が言葉の口にしたのでした。

あの子に出会い、思いを伝え合ったからこそわかったことがあります。言葉は耳が聞こえなくても届くということ。言葉は音ではありません。「思い」です。社会ではよく、目が見えなかったり、耳が聞

こえなかったりする人を「障がい者」と呼びます。しかし、目の見えないこと、耳の聞こえないことは障がいではありません。例えば「耳が不自由なら音楽が楽しめないだろう。」というのも、結局、健聴者の偏見です。「そういう人たちと通じ合うことは難しい。」そんなふうに思ってしまう私たちの考えこそが、通じ合うことを妨げる壁なのです。障害なのです。私にとって、外の景色を見ること、母の声を聞くこと、歌を歌うこと、これらは当たり前です。しかし、本当に当たり前なのでしょうか。そんなことは 아닙니다。自分の日常は誰かにとっての非日常です。健聴者だから、難聴者だからというわけではありません。人は誰も、はたから想像もつかないほど多くのものを抱えて生きています。違った日常を過ごす者同士が通じ合うには、お互いの当たり前をほんの少しだけ受け入れ合うだけで良いのです。そのために何とか少しでも理解したいと会話を重ね、その人の思いに寄りそいたいと行動を起こす……。お互いが歩み寄ればそこには障害となる壁はありません。私と障がい者ではなく、「私たち」になるはずです。そういつた受け入れ合いをすることこそが、私たちの社会をより良くしていくのではないのでしょうか。

私の家には手話の本があります。母には「独学で手話を学ぶのはそう簡単ではないよ。」と言われます。しかし、私は少しでも多くの人の心に寄りそうために、これからも手話を学んでいきたいと思うのです。

作文を書くに当たって

私は、この体験を通して、声や手話、点字などの手段ではなく、伝えたいという思いと相手を理解したいと強く望むことこそが、他者と繋がるために最も大切であると学びました。難しい漢字や正しい発音よりも、素直な気持ちをそのままに伝える……。それがどれほど重要であるかを、他の人にも知ってもらうため、この作文を書きました。